

「子どもたちが空に向かい、両手を広げ」。異邦人と聞くとこの歌のフレーズが頭に浮かぶ方は、わたしと同じ世代なのでしょう。この歌を歌ったシンガーソングライター久保田早紀さんは、現在、久米小百合という名で、ゴスペルシンガーとして活躍されています。

「異邦人」を作詞した頃の彼女はクリスチャンではなく、もともとは「白い朝」というタイトルだったそうです。「異邦人」というタイトルは、神秘的なイメージを醸し出すためにつけられたものだそうです。

それはともかく、異邦人は「外国人」という意味で使われる言葉です。しかし聖書の中では、「非ユダヤ人」あるいは「非イスラエル人」の総称として用いられます。

ユダヤ人には、自分たちは神さまとの契約によって立てられた民であるという強い自覚がありました。それだけならよかったのですが、割礼を受けていない異国民を蔑視していた、つまり何の特権も持たない民だと下に見ていたのです。こうしてユダヤ人は、自分たち以外の民族を「異邦人」と称し、宗教的祭儀から排除するだけでなく、交際はおろか共に食事することも禁止していったのです。

しかしイエス様は、福音書を見るとほとんどの宣教活動はユダヤ人を対象としているものの、ご自分の元に来る異邦人を拒むことはありませんでした。

イエス様のその姿勢を知ったパウロは、ローマの信徒への手紙でこう語ります。「それとも、神はユダヤ人だけの神でしょうか。異邦人の神でもないのですか。そうです。異邦人の神でもあります。」(ロマ 3:29)

イエス様を通して神さまの恵みは、「異邦人」であるわたしたちの元へも、届けられるようになったのです。

次回は「癒す」です。お楽しみに。



「キリストとカナンの女」

ジャン＝ジェルマン・ドルーエ (1763～88年)

これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。

(ルカによる福音書 2章 31～32節)

